

「家庭愛和」の実践で平和をつくる

上 廣 哲 治

広島、長崎に原子爆弾が落とされてから、七十三年の夏を迎えます。戦争について何かを語り、書くとしても、戦後世代の人間は、あの凄惨きわまりない戦争について体験的なことは何も語ることはできません。総務省は四年前に戦後に生まれた人々が日本の総人口の八〇パーセントを超えたと発表しました。戦後に生まれたというのは、終戦の昭和二十(一九四五)年八月十五日以降に生まれたということです。戦後から戦争を知りようがありません。厳密にいえば、それ以前に生まれた人でも、まだ幼ければやはり戦争について語ることはできないでしょう。自らの体験として戦争を語れる世代は少なくなってきたのです。

戦後世代が戦争について知ることができるのは、本や雑誌、新聞記事やテレビのドキュメンタリー番組などを通してです。私もあの戦争について知るために、折にふれて本や新聞記事に目を通してきます。そんななかで二つの印象的な文章に出会いました。その一つは新聞記事で、もう一つはエッセイです。今年の一、月、フランシスコ・ローマ法王が、長崎の原爆投下後に撮られた写真、「焼き場に立つ少年」

をカードにして配布することを命じたという記事を読みました。写真は直立不動の姿勢で赤ん坊を背負う半ズボン姿の少年が写っていました。赤ん坊はすでにこと切れています。少年は、大きな穴で次々と遺体を焼く臨時の火葬場で、背中の弟を火葬する順番を待っていたのです。

この写真は、アメリカの従軍カメラマン、ジョー・オダネルさんが、原子爆弾が投下された長崎で一九四五年九月に撮ったものでした。彼は海兵隊記録班のカメラマンとして原爆による破壊状況を記録するのが任務でした。軍の決まりで人物を撮影することは禁じられていたのですが、被災地の惨状に衝撃を受け、ひそかに持ち込んだ自分のカメラで被爆した人々を撮りました。その一枚が、「焼き場に立つ少年」です。法王は、「少年の悲しみは、かみしめて血のにじんだ唇に表れている」とカードに簡単な説明文を付けました。そして、「戦争の結果」というメッセージと自らのサインを添えたそうです。

背筋をピンと伸ばして涙を見せることなく悲しみに耐える少年の姿からは、言葉では表現できない重く深い感情が伝わってきます。私にとって衝撃的だったのは、戦争は終わってもなお、子どもたちを悲しみの底に沈ませるのだという事実です。

印象に残った文章のもう一つは、杉山龍丸たつまるさんが書いた「ふたつの悲しみ」と題されたエッセイでした。杉山さんは作家・夢野久作ゆめのきゅうさくの長男で、重傷を負って戦地から帰還、陸軍少佐として終戦を迎えました。このエッセイは、戦後の復員事務での体験をつづったものです。

戦争が終わると召集を解かれた兵士は帰郷するのですが、なかには消息のわからない人がいて、残された家族がその安否を問い合わせにきます。それに応えるのが復員事務の仕事です。

「私たちは、毎日毎日訪ねてくる留守家族の人々に、貴方の息子さんは、御主人は亡くなった、死ん

だ、死んだ、死んだと伝える苦しい仕事をしていた」と杉山さんは書きます。

そこに小学二年生のオカッパ頭の少女が訪ねてきました。すでに母親は死に、一緒に住んでいる祖父は病気で動けないため、代わりに父親の消息を聞きに来たのです。帳簿で該当者を調べると、「戦死」と記載されていました。杉山さんは少女にどのように言いかけたのですが声が出ません。

「私は少女に答えねばならぬ、答えねばならぬと体の中に走る戦慄を精一杯おさえて……」／「あなたの父さんは、戦死しておられるのです」といって、声がつづかなくなつた／瞬間少女は、……わつと、べそをかきそうになつた。涙が、眼一杯にあふれそうになつて必死にこらえていた／それを見ている内に、私の眼に、涙があふれて、ほほをつたわりはじめた／私の方が声をあげて泣きたくなつた」

杉山さんが、父親の戦死した場所・状況を紙に書いて渡すと、少女は「涙一滴、落とさず、一声も声をあげなかつた」そうです。でも、顔をのぞき込むと、「下唇を血が出るようにかみしめて」いたのです。このエッセイは、ベトナム戦争が泥沼化していく頃、第二次世界大戦で失つたものや戦争の悲しみを今一度考える必要を感じて執筆されたものでした。杉山さんは最後に次のように書いています。

「戦争は、大きな、大きな、なにかを奪つた。／悲しみ以上のなにか、かけがえのないものを奪つた」
「焼き場に立つ少年」を撮影したジョー・オダネルさんは帰国後、写真を屋根裏部屋に隠していましたが、四十数年後に、被爆者の苦しみを知るとアメリカ各地で写真展を開いて原子爆弾の悲惨さを訴えて生涯を終えたそうです。杉山龍丸さんはインドで、砂漠地帯の緑化運動に従事し、かの地では「グリーン・ファーマー」として知られているそうです。

考えてみれば、焼き場に立つ少年も、父親の消息を聞きに来た少女も、名誉会長とほぼ同世代の人々です。恐らく「悲しみ以上のなにか、かけがえのないもの」を失つたと、肌身で感じた世代なのではないでしょうか。戦争の悲しみを体験した名誉会長が、「家庭愛和を実現しなければならぬ」「我も人も仕合わせを実現する社会を築かねばならぬ」と、それこそ命懸けで、赤誠の情熱を込めて繰り返して訴えつづける気持ちの底には、「かけがえのないもの」を二度と奪われてはならないという悲痛な思いがあるのではないのでしょうか。「かけがえのないもの」——それは、家庭愛和であり、家族の仕合わせではないか、と私は思うのです。

「平和祈念朝起会」で私たちは、内外問わず、すべての戦争犠牲者を追悼し、二度と悲惨な戦争を起こさないことを誓い、平和を守る決意をいたします。しかし、わが会が目指す「平和」とは、「戦争がない状態」にとどまるのではなく、人々がそれぞれ「仕合わせに暮らせる社会の状態」にまで高めていかなければなりません。

現実問題として、私たち一人ひとりに戦争を止め、平和をつくる力があるかどうかはわかりません。しかし、人と人との絆で強固な平和をつくり、仕合わせな社会を築くことで、戦争を起こしにくくすることはできるはずです。その力になるのが、「家庭愛和」「家族の仕合わせ」「我も人も仕合わせな社会」を目指す実践なのです。私たちは家庭愛和を実現することで平和をつくるのです。

そこで今月の実践課題です。今、私たちは、家族一人ひとりが元気でいて当たり前として接しています。しかし、ひとたび戦争が起これば、それは微塵に粉碎されるかもしれないのです。目の前にいる妻が、夫が、子どもたちが、かけがえのない存在であることを再確認するために、意識して家族を慈しみ、腹を立てず、不足の思いを抱かずに、「家庭愛和」の実践に励んでまいりましょう。